

地域に密着した中高年者の健康づくりと 生きがい支援活動

当法人は老人福祉の専門性を生かし、真の意味（ほんまもん）での老いても安心、安全、愛情ある生活ができる地域福祉を作り上げることを目的に事業を行うために「ほんまもん地域福祉室」を設置し、専門の担当職員を置き、地域に向けた事業を展開している。

社会福祉法人 **明光会**

〒515-3421 三重県津市美杉町八知729-1

TEL：059-272-8800 / FAX：059-272-1110 / E-Mail：j5mszszm@za.ztv.ne.jp

【法人の概要】

法人設立年：平成12年7月

経営施設、事業（数）：1施設 4事業

経営施設、事業（種別）：

特別養護老人ホーム…定員50名（1施設）／
短期入所生活介護…定員20名／通所介護…定員15名

【法人の理念・経営方針】

この法人は、多様な福祉サービスがその利用者の意向を尊重して総合的に提供されるよう創意工夫することにより、利用者が、個人の尊厳を保持しつつ、自立した生活を地域社会において営むことができるよう支援することを目的とする。

（平成19年度基本方針）

介護保険制度がスタートし、補助金・交付金が枯渇する中で、今こそ自立した「経営」を考える時期である。つまり法人も変化に対応できるものだけが生き残れるということである。

しかし、減収や減益という事態に対して過剰な費用圧縮を行うのではなく、職員の施設内外への研修参加、給与体系を見直し等、職員のモチベーション向上の取組みを進め、利用者の方の「尊厳あるケア」を全職員が一丸となり提供する。

特にリスク対策を強化するため、各委員会の役割を再考する。

次に、介護保険制度は施設から在宅へ、予防重視型にシフトする中で、地域の多様なニーズに応えるべく医療機関や民生委員等、多機関との連携を深め、地域単位で切れ目なく包括的な介護を展開する。又、地域の中高年者への就労支援やえみ寺子屋を継続し、法人中枢の機能である広報活動も積極的に行う。

社会福祉法人職員は、善意があり、経営があり、社会的役割を担っているとの意識が重要で、自らが地域ケアの一員であり、ケアを超えた地域の一員であることを自覚する。ケアはプロ、介護保険制度については専門中の専門であるといえる強い法人を目指す。

実施施設の概要

施設名：笑美の里

施設種別：特別養護老人ホーム

活動の対象：地域の方々

利用者など

活動実施の背景、実施にいたった理由

当法人の主たる事業活動機能である老人介護支援を基礎に、当法人が「地域福祉の推進」全体のどの部分を担うことができるのか、その糸口を探るため。

平成14年7月、(旧)美杉村の村長、議会議長、社協会長と当法人理事との懇談を行った。

当時高齢化率43%、過疎の進行、財政再建問題、市町村広域合併等々の大きな決断を迫られている時期にあり、日常的な要援護者等の生活支援の仕組みづくりや地域福祉力の回復等々は、住民の自立・自律的な活動を尊重するという姿勢の中で、当法人の具体的な活動提示に対し、行政としての可能な支援を進めるという結論に至った。

平成15年7月、「地域福祉推進専任職員の採用について」当法人理事会で承認を得、平成16年1月に採用し、3月から「ほんまもん地域福祉設立準備室」を設置し準備を開始する。

平成17年4月、「ほんまもん地域福祉委員会」を発足し、具体的な活動を開始する。

平成18年4月、「社会福祉法人明光会 地域生活支援活動に係る助成金の交付要領」を定める。

実施内容

平成16年4月、地域福祉ニーズの把握と評価を目的に「高齢者意識調査」を老人クラブ協力を得実施。【65歳以上無作為抽出553名（90%）回答】

集計からは「食事・運動等健康づくりに留意している」、「病気（予防）に関する情報や、医療・介護保険制度等の情報不足」、「まだまだ働きたい」と思っている方が多く、また「社会奉仕、生きがい、他者との交流（楽しみ）、健康づくり（認知症予防等）」等を重んじる傾向が強い。さらに医療サービスや日常必需品の確保等、社会サービス資源が極めて乏しいこの山間僻地であってもこの地に暮らし続けたいという思いと共に、簡素化されつつある「古くからの伝統」（祭り・季節行事）や「教え」（漬物や保存食等）を現代社会とのバランスをとりながら受け継いでいる素朴な営

みには、自然や物を大切に「本物の暮らし」を再認した。

平成16年7月 老人クラブ支部単位の協力を得、意識調査集計結果をもとにした当法人主催の「出前トーク」を実施し、「ほんまもん地域福祉」をテーマに、「健康・生きがい（交流）・就労」の要素を備えた活動の提案を進めた結果、平成17年5月 老人クラブ役員（現役・OB）有志が中心となり「友交会」を発足。毎週定例活動日を定め、施設周辺環境美化作業を会に委託し就労機会を提供するに至った。また情報収集・学びの場、そして交友の場として「えみ寺子屋」を月例開催し、医療や介護に関する知識・制度等についての講座、季節には潮干狩りやぶどう狩り、また施設利用者と共に正月飾りの準備や演芸会への参加等々施設の運営にも主体的に参加を得ている。【平成19年7月 会員18名】

活動効果

（利用者）地域のホットな情報、季節の風と共に、地域で活躍されている同年代の友交会々員（以下、「会員」）が毎週施設へ出かけて頂けることで、ある利用者の方は「生活感」を回復されたとおっしゃられている。またある利用者の方は、菊作りや野菜作り等の具体的な内容を会員と談笑され、会員の方からも大変勉強になったと率直な感想も聞いている。「生活の場」で

ある特養において本当の意味での生活とは、地域社会と一体的なものでなければ実現しないということ、利用者も職員も会員もおぼろげに掴みかけたところである。

地域などの反響、地域への影響等の評価は行っていないが、会員への入会問い合わせ等も徐々に寄せられており、これまで会員枠を20名とし運営してきたが拡大の方向で検討中。

会員からは「とにかく楽しく、汗をかき、学べることはすばらしいこと、健康でもっともつと長生きしたい」など好評を得ている。

今後の課題

「生きがいと健康づくり」をテーマとした支援活動と同時に、地域に密着した支えあい、助け合いの仕組みづくりが益々必要となるなかで

- ①この地域ならではの「ノーマライゼーション」をさらに啓発普及し、地域福祉の担い手の再育成を図ること
- ②将来を展望し、会員をはじめ「ほんまもん地域福祉」の推進に賛同頂く方の輪が広がり、例え介護が必要になっても、この地域で暮らし続けることのできるよう、心の支えとなることの重要性とネットワークの構築を進めること
- ③近い将来における特養の真のあり方、役割を展望し、この地域ならではの暮らし方を早期に見出し、提案と実践の支援をすること